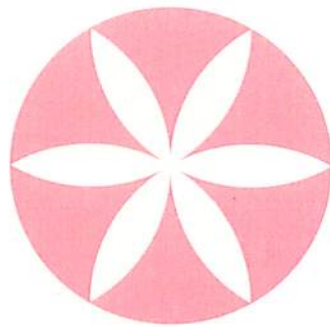


京都、
らうらうじ



きれいなもの。
ふ



きれいなもの。かわいいもの。きもちいいもの。

洗練されていて美しい、京都の“らうらうじ”なモノとヒトとをつなぐストーリー。「らうらうじ」【古語】上品で洗練されていて美しい

写真 小林敏伸 / 川内倫子

キュートな、キョート、大集合。京都スーベニールコレクション

KYOTO DEPARTMENT

<東京>2007.9.8→24 パルコミュージアム(渋谷パルコ・パート3/7F) <名古屋>2007.10.6→29 パルコギャラリー(名古屋パルコ西館/8F)

【ご購入特典】パルコで開催される展覧会に無料でご招待。

この帯の折り返しに無料招待券が付いています。



確かな手仕事で雅を伝える京和傘

傘といえば和傘のほかにはあり得なかった時代もいまは昔。雨降りの日、街に咲く傘の花はほぼ完全に洋傘のものだ。

けれど、そうした昨今の劣勢にもめげず、京都でたった一つ、和傘の製造・販売に勤む老舗がある。茶道家元三千家が集う上京の一角に佇む「日吉屋」だ。

あえて茶道家元の存在に触れたのはワケがある。何を隠そう、この店は家元御用達の本式野点傘を全国で唯一製作できる稀有な技の持ち主なのだ。茶人の審美眼にかなった匠の技が、番傘や蛇の目傘などの普段使いの和傘に波及したの
は言うまでもない。

なるほどと感心したのは、番傘より、よそいき感のある蛇の目傘を開いた時。

落ち着いた色の和紙を張った傘を広げた途端、華奢な子骨の周りにほどこされた飾り糸の鮮やかな幾何学模様が目に見え
び込んでくる。この繊細な装飾術は、お家芸の野点傘にも共通する見どころの一つ。こんな和傘なら毎回差すのが楽し
みで、雨が待ち遠しくなりそうだ。

骨の下準備から仕上げまで終始一貫して自店で作り上げている「日吉屋」だが、一時は後継者不足で存続が危ぶまれた
時期も。しかし、和傘に魅了された娘婿の西堀耕太郎さんが五代目を継いだおかげで安泰。京の和傘はちよつとやそつ
とじゃ吹き飛ばさない。

白抜きの輪が入る中人(なかいり)と
無地の2タイプを揃える蛇の目傘は2
万1000円〜。開いて初めて和紙の色
彩やリズムカルに連なる装飾と子骨、
糸飾りなどの美しいディテールがあ
らわになる。

日吉屋
075-441-6644
京都市上京区寺之内通堀川東入ル
百々町516
10:00~13:00
月曜休
<http://www.wagasa.com>
map.111

